



特集

# 子育てに学ぶ ピアノレッスン

ピアノ指導者が増えていくに伴い、母親がピアノ指導者である子どもも今後増えていきそうだ。しかし、ピアノ指導者と母親の両立に悩まれている先生、あるいはその2役が混同している先生は意外に多い。

今回の企画では、「ピアノ指導者であり母親である」という立場にある約40名の会員の先生方に、子育てとピアノレッスンに関する体験談やご意見をお伺いした。両立の工夫、子育てのレッスンへの効果、レッスンへの母親の取り込み方について等、考え方のヒントにさせていただけたらと思う。

- 1 ピアノレッスンと子育て、その両立方法とは？
- 2 子育てこそが子ども研究の場  
ピアノレッスンが「教育」に変わる時
- 3 ピアノ指導者と母親の2役をこないしてみよう  
ピアノ教育における「母親」の役割

## 1

ピアノレッスンと子育て、  
その両立方法とは？

母親としても、ピアノ指導者としても、最善を尽くしていきたいと思う。だからこそ、この2役の両立にはいつも頭を悩ませられる。

「子育てに追われ、自分の勉強が疎かになりがちです。自由時間があっても、育児の方に時間をとられ、ピアノを弾く間がありません。生徒さんにも申し訳なくて…」という育児現役の先生の声もあれば、

「お守りを頼めないときは、レッスン室にベビーサークルをおいてその中で遊ばせながらレッスンしたこともありました。2階に寝かせてのレッスンにハラハラし通し。レッスン途中で騒がれ、抱っこしてレッスンをしたこともありました。」と振り返ってくれる先生の声もきかれた。

子育て経験のある先生方は、どう乗り越えてきたのだろうか。

ご両親と同居している、あるいは近くに実家がある、という環境に置かれている先生はそう多くはない。レッスン中の子どものお守りに当たっていただける協力者は、自分から「作っていくもの」のようだ。身近な人間関係をいかに豊かにしているかが問われそうだ。

「両親と同居ではなかったのですが、子どもが小さい時は主人にかなり世話になりました。土、日曜日にびっしりレッスンを組んで、主人の自由を束縛し、全面的に協力してもらいました。演奏会に出かけることも多かったのですが、会社から早く帰ってきてもらうことも…。とても感謝しています。」

「子どもが人見知りする前に出来るだけ早い方がいいと思い、生後1カ月から、ご近所の方にベビーシッターをお願いいたしました。見ていただく時間を短くするために、レッスンの時間中にお昼寝をするように習慣づけました。しかし、子どもの受験の時は、今一生懸命してあげなければと思い、3カ月間レッスンをお休みさせていただき、その間私の生徒の音大生にレッスンを代わりにしてもらっていました。」

「レッスン中は付き添ってこられる親御

さんに子どもと遊んでいただきました。当時は、先生と生徒の間で『ありがとうございました』とお礼を言い合っていたように思います。」

「出産後レッスン再会にあたり、保護者にきちんと事情を説明し、理解していただきました。今のところトラブルはありませんが、ご迷惑を掛けることを前提にし、子どもを見てくださるご父兄には月謝を考慮させていただいています。」

「出産後1年間は短大を休職し、自宅レッスンのみ行いましたので、その時間帯のみ個人経営の保育園に預けていました。特に、幼稚園の後、主人の帰宅する夜の7時半まで、私立保育園へ預けていた2重保育の時期は、保育料が私の仕事の収入ほどになる時期もあり、少々無理を感じたこともありました。仕事と子育てはきちんと分けるべきと考えて行ってきました。」

レッスン中の子どものお守りの協力者  
身近な人間関係の中から、自分で作り出した



子どもが家にいる時間がレッスン時間は？練習は？

9:00	12:00	15:00	18:00	21:00	24:00
自分の時間 家事&勉強	昼食 夕食の準備も	子どもの帰宅 レッスン開始	レッスン続行 子どもも家事	家族との団らん 子どもの練習もチェック	

レッスン時間は、子どもが家に居る時間とが一致してしまう。子どもとのコミュニケーションはどうされているのだろう。

「家事などは自分の工夫で何ともなりますが、子どもへの精神的な問題はそうはいかず、特に子どもが帰宅した際、声が掛からない状態は避けるようにしています。私のレッスン中の時間帯の生活で連絡したいこと（おやつ、着替え、ピアノの練習など）は、詳しく手紙を書いています。」

子どものピアノの練習を側で聞いてアドバイスしているのが、数少ないコミュニケーションの時間という方も…。

レッスン室と子どもの練習室が別にあるご家庭は希だ。レッスンに忙しいと、つい子どもの練習が後回しにしがちだが…。

「自分の子どものピアノを見てあげる時

間がなくて困っていましたが、ある先生から『レッスン時間内に自分の子のレッスン時間も組み入れること』を勧められ、僅かな時間ですが、確保できるようになりました。」

「自分の子どもの練習は、子どもと話して朝する事に決めました」

子どもがいつも元気とは限らない。いざという時は側にいてやらなくてはならない事態もある。

「子どもの具合が悪い時いつでもレッスンをお休みできるように、5週目でもレッスンをして（レッスン日の）預金をするようにしています。」

また、「レッスンは午後6時には切り上げ、その分午前中に大人のピアノ指導を増やすことにした」という案もあった。

私の子育て体験記（1）



子どもに望む姿は、  
まず自分の行動で示したい

地村比登美先生  
（指導歴15年・広島県在住）

子ども達が幼いうちは、ピアノ指導ばかりにこだわらない方がいいのではないだろうか。生徒募集に力を入れるよりも、自分の身近な音楽活動（コーラスなど）を通じて、「ピアノが弾けると、こんな楽しいことがあるんだよ」と子ども達に見せてあげるのに、貴重な時期だと思っております。

さらに、子どもにばかり練習を強制しないで、自分もある目標に向けて勉強している姿を見せてあげることが必要だと、子育てをしてみて感じました。

子どもが小学校の低学年の頃までは、親子で連弾のつもりで片手ずつ練習したり、出来るだけ側で聴いてあげるようにしていました。自分でさくりに弾きし作曲(?)らしきことをして、聞き慣れない

メロディーが聞こえてきたときは、特に着めてあげました。それを5線ノートに書き残すのになんか書くか分からず、代わりに書き取ってあげたこともありまして。また、1回弾いたら「ゾウの顔」や「花」など、好きなマークを書いてあげると、喜んで何度も聴かせてくれました。だから、導入期のテキストは落書きだらけで、思い出さばいんです。

そんな子どもたちも、ようやく中学2年生、小学5年生。子育てが身体的に楽になってきたとはいえず、今度は学業面で心配事がいっぱいあります。特に、子ども達の学校帰りの表情を見ることが出来ず（レッスン時間のため）、夜に同じクラスのお母さまから電話をもらって初めて、「大変なことがあった」と知らされることも…。PTAの会合には出来るだけ顔を出し、役員なども仕事に差し支えない範囲で引き受け、子どもの様子について、外から出来るだけ情報を得られるよう努力しています。

子どもに伝えた「協力」の意味  
今ではレッスンの良きサポーターに

レッスン妨害を横行していた(?)子どもも成長し、母親のしつけ次第で、やがては「協力」を覚えていく。

「子どもがまだ幼かった頃は、レッスン中にレッスン室に入ってきて色々要求しないように…と怒ってばかりいたように思います。生徒がだんだん増えていき、子どもにかまってあげる時間が少なくなって、随分と悩んだ時期もありました。幸いにも、外の先生にご指導をしていた頃(長男6歳、長女3歳)から、『自分のレッスンの時に邪魔をされるのはイヤでしょう?先生も一生懸命教えてくださっているし、習う方も一生懸命に習いたいものね…』と言ってきかせたことをよく解ってくれるようになり、私のレッスンも少しずつ集中できるようになりました。」

「3人兄弟の上2人の女の子に協力を呼

びかけ、食事の準備、洗濯物の片づけ、下の子の面倒など、1つ1つ教え、うまくいかなかった場合を何度も乗り越え、やっと両立できる状態で今は落ちつくようになりました。彼女たちは大変だったかもしれませんが、かえって何でも出来る子になり、そうやって家族は助け合っていくことが大事なんだと言う、良い勉強になっていると思います。」

「子育ても家事もレッスン時間帯に重なって障害になってしまう場合が多く、子どもに家事を分担させています。週2回の夕食は長男(中3)、洗濯は長女(小4)の仕事というふうに。協力することが当たり前と言うように育ててきたので、忘れることはあっても、嫌がったりするようなことはなく、親子のコミュニケーションもうまくいっていると思います。」

子育て真っ直中の先生へ

子育てもピアノ指導も、決して中途半端な気持ちでは出来ません。「無責任」ではどちらも取り返しが聞きませんから…。だからこそ、遣り甲斐も大きいのだと思います。自分自身が指導することに情熱を持ち、常に勉強したいと望むならば、そして、生徒達が指導者を何よりも信頼するならば、子育てとの両立は出来るのではないのでしょうか。

子供と一緒に、自分自身も成長していきたい。時間的制約、行動範囲の制約はやむを得ないこと。自分の子どもに、かなり「我慢」させていると思いますが、一生懸命の母の姿に、子どもなりに我が母を認め、誇ってくれているのではないかと思います。(多胡まきみ先生)

子育てもピアノ指導も、掛け替えのない大切な仕事であるとの認識は、みな一致している。これらを両立させていくためには、このように

- ・どの程度、協力者を得られるのか、
  - ・無理のない一日の時間配分は、どの程度なのか、
  - ・子どもの成長度は今どうなのか、
- について考慮しながら、責任のとれる程度に仕事を調整していきたい。

どちらも「質」が求められている。そしてどちらも真剣にこなすことにより、相互に効果が得られるのである。

では、その効果について意見を求めてみよう。

耳より情報

現在ピティナ・ピアノコンペティションの真っ最中ですが、育児中の先生方が多いものの、会場内での保育施設まで用意できないのが現状です。こんな時には、プロのベビーシッターに子どもをお預けしてみたいかがでしょうか。厚生省認可の「社団法人全国ベビーシッター協会」は、全国99カ所に加盟会社を持っています。利用料金は全国平均 1,500円/時間 とのこと。

お問い合わせ：03-3797-5020

なお、クレーム等は各地の消費者センターで受け付けています。

# 2

## 子育てこそが子ども研究の場 ピアノレッスンが「教育」に変わる時

子育ての経験が、ピアノ指導のヒントになることは非常に多いという。「音楽」に比重の置かれていた意識が、指導対象の「子ども」に向けられた効果なのだろうか。

子育てをしていてピアノ指導に生かされたこと、つまり、「教育」に不可欠な何かの発見だったのではないだろうか。

これらの発見をもとに、私達のレッスンをチェックしてみたい。

### 1人の人間として向き合うようになった

「子どもの心理や成長していく様子、学校や家での生活が分かるようになるにつれ、子どもを1人の人間として接することが出来るようになりました。こちらの言い分ばかりを押し通さないようにすること。練習してこなかったり、理解できていないことがあると、まず指導者の言い方や教え方が適切でなかったのでは…と思うようになりました。」

1つの人間関係を築く上で、最も根本的なことかもしれない。大人同士で接するときのような意識で、「1人の人間」として子どもにも接していきたい。

#### <Check 1>

レッスンの中で、身勝手な主従関係を作っていませんか？

### 年齢に応じた成長度が見つかるようになった

「じっくり待つということが学べたように思います。子どもがいなかった時は努力をすればいつでも出来るものと信じて込んでレッスンを進めておりましたが、それは一面大変な間違いであったと気付きました。」

「学校でどの程度の算数や国語の力が付いているかが分かるので、言葉の使い方、考え方の例などが表現しやすくなったように思います。」

「この年齢では〇〇ができる、と言う基準が分かるようになって、基準を上回っていることに関しては、些細なことであれ、常に評価してあげられるようになりました。」

「子どもの表情やしぐさを見て、今どれくらい集中しているかが感じとれるようになりました。レッスン時間の中で教えたことはいつもたくさんあるので、その限られた時間でいかに教えられるかに、以前は懸命になっていました。子どもの集中力に応じ

た、レッスンの時間配分が大切ですね。」

年齢不相応の指導をしても、子どもは「理解しなくちゃいけないんだ」と思ってしまう。自信喪失につながりかねない。

#### <Check 2>

子どもの成長度に応じたペースや能力を理解した上で、指導していますか？

子どもの興味や学校生活を軸に話題が作れるようになった

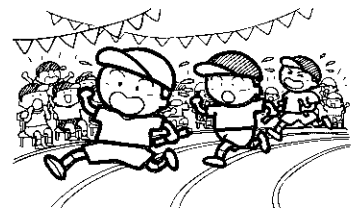
「子どもの興味のある部分や身近な部分で曲の説明をすることが出来るようになりました。たとえば、小学校の行事やテレビのことで話が通じるだけで、生徒との心の通じ合いが実感できるものです。体育大会やマラソン大会などを応援するなど、ピアノレッスン以外で生徒を励ますことが、案外生徒との絆を深め、以後のレッスンも良い影響が出ます。」

「生徒が疲れている時や気持ちに乗っていない時は、無理をさせない。今の子ども達をよく知ることや興味のあることをおしゃべりし、その話からレッスンにつなげていくようにしています。」

ごく普通の人間同士も会話が主体だ。子どもの世界に参入することで、子ども達との距離は確実に近づく。

#### <Check 3>

レッスン中に、生徒達とふつうの会話を楽しむことができますか？



子ども  
神経  
「自  
短気  
誉め  
「これ  
いうと  
られる  
の態度  
飽きる  
状況は  
う、配  
ること  
てきよ  
「子  
チの使  
子と  
進行し  
に限ら  
という  
「毎  
るので  
うこと  
ないの  
ます。  
<O  
レッ  
子と  
指導の  
「挨  
きりし  
はピア  
何でも  
もにし  
じて、  
皆同じ  
注意し  
至れ  
への弊  
<C  
指導  
芽を

子どもの反応に対して  
神経を使えるようになった

「自分の子どもとなると、親はつい感情的になり、短気になりがちなので、子どもに怒らせないように、誉めることが多くなるようにしています。練習でも、『これだけでできれば、先生誉めてくださるよ!』っていうと、子どもは調子に乗ってきます。先生に誉められるのが、何より嬉しいようです。そんな子どもの態度を想像し、私も指導に当たっています。また、飽きるのが非常に早く、何か月も同じ曲を練習する状況は避け、曲の雰囲気も様々なものを選曲するように、配慮しています。『来週は今より上手になっていること、楽しみに待っていますね』と一言つけ加えてさよならするようにしています。」

「子どもが傷つくような質問は避けたり、アメとムチの使い分けをするのが上手になっていきます。」

子どもの反応を見ながら確認しながらレッスンを進行していくことが大切なようだ。これはレッスンに限らず、日常の子どもの練習中にも言えることだという。

「毎日の練習を聞いていると、つい口を出したくなるのですが…他の部屋から注意したり怒鳴ってしまうこともあります。これは子どもの反応が見られないので、決してやってはいけない、と反省しています。」

<Check 4>

レッスン中に、生徒の顔を見ていますか?  
子どもの気持ちを察する努力をしていますか?

指導の加減を留意するようになった

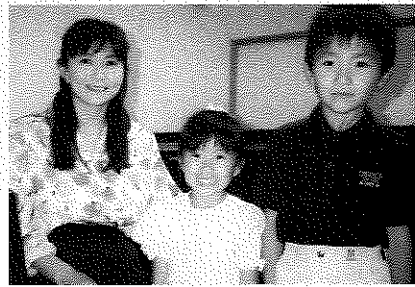
『挨拶をきちんとする』『何でも曖昧にせず、はっきりした明るい子どもに育てる』このようなしつけはピアノ教育にも通じているように思います。また、何でも親が用意してやりすぎると、意欲のない子どもにしてしまうような気がいたします。ピアノも同じで、1~10まで指導しすぎると、個性のない、皆同じような演奏になってしまうので、この点には注意しています。」

至れり尽くせりの過保護教育が及ぼす意欲や個性への弊害は、ピアノレッスンにも通じる。

<Check 5>

指導のし過ぎが原因で、生徒の個性や創造力の芽を枯らしていませんか?

私の子育て体験記 (2)



藤原佐和子先生

(指導歴13年・高知県在住)

叱咤激励しながら、子どもの進路を軌道修正してあげることも、親の役割

コンペティションの前は、生徒も気になるし、我が子も気になるし、精神的にまいってしまいます。ついつい後回しになってしまいう自分の子どもの練習を何とかしなくてはというストレスから神経質になってしまい、子どもの方にもストレスがたまるようです。何とか練習させても、子どもが怒る、私が怒る、子どもが泣く、挙げ句の果てに夫婦喧嘩になってしまい、「こんなままでしてピアノをさせなくても良いんじゃないか」と逃げ出したくなることも、よくあります。夜、生徒のレッス

スが終わると、子どもの練習なので、私の方が「帰宅恐怖症」になってしまいうこともありました。  
そんな時、娘の保育園の先生が、「今は大変かもしれないけど、子どもが自分の道を選ぶときに選択する道は、いくつもあった方がいいわ。叱咤激励しながら、軌道修正してあげることも、親の役割。お母さん、頑張りなさい」と言ってくださり、涙が出るほど嬉しかったことがあります。  
毎日の生活の中で、子どもと接することの出来る時間は、殆ど練習の時しかないのです、もっと話をしたり遊んであげたりしてやりたいという思いはいっぱいあります。

母親とピアノ指導者。どちらも子どもを教育するという立場で共通し、相互に影響を与え合うことが分かった。これは同時に、どちらかが欠けてしまう、あるいは双方の立場が混在してしまうのは、子どもへのピアノ教育にとってマイナスでしかないと意味するのではないだろうか。

では次に、母親という立場を明確にしながら、それぞれの役割分担に目を向けていきたい。

# 3

## ピアノ指導者と母親の2役をこなして考えてみる ピアノ教育における「母親」の役割

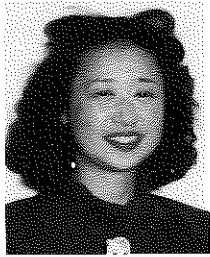
自分で我が子のピアノ指導をされている方、外の先生に任せっきりの方。どちらのタイプにもそれぞれ難しい問題を抱えているようだ。

しかし、子どもの教育において「母親」がピアノ指導者と大きく異なる点は、例えば子どもといる時間の長さ一つにある。ピアノ指導者は、そのような「母親」固有の立場を上手に引き入れてこそ、良いピアノ教育が実現できるのではないだろうか。

ピアノ教育における「母親」の役割を探りながら、両者の連携について考えてみたい。

### Interview

#### 私の考える 「母親の役割」



小倉郁子 先生

宇都宮短大音楽科研究科修了  
ピアノ指導歴18年  
現在同短期大学講師  
指導者賞歴：過去4回受賞  
自宅では20名の指導にあたる

息子さんの崇以君、由資君は、現在小学校6年生の双子の兄弟。水泳では関東大会連続出場、エレクトロニクス工作展では文部大臣賞、学校では委員長と各方面で大活躍。もちろんピアノでもコンペティション全国大会出場歴2回のキャリアで、スーパーマンぶりを遺憾なく発揮している。

そんな彼らを支える母親、小倉郁子先生はどんな理念を持って、今日まで教育をなされているのだろうか？

—お子さんのピアノの練習時間は  
どうしていますか？

10分しかなければ10分で出来ることをやらせるようにしています。5回しかできないなら5回分上達出来ればいい、というスタンスです。これは、今までの練習の仕方です。これは、今までの練習の仕方に身に付いているので、自然に出来るようです。子どもが小さいときから、短時間でどのくらいのこと出来るのか、無駄なこととはどういうことか、集中しているかどうか、そして「少ない時間で中身は濃く」ということを教えてきましたから。私自身、子どもにピアノが弾けるようにと願いながらも、ピアノに縛られることなく、他にやるべきこと、やりたいことは全部やらせてあげたい、という思いがありました。

「色々やりたい」という子どもの要望を受け入れてあげ、その代わりに、親の要望も、当然のこととして受け入れてもらうことにしています。そのバランスが大切ですね。

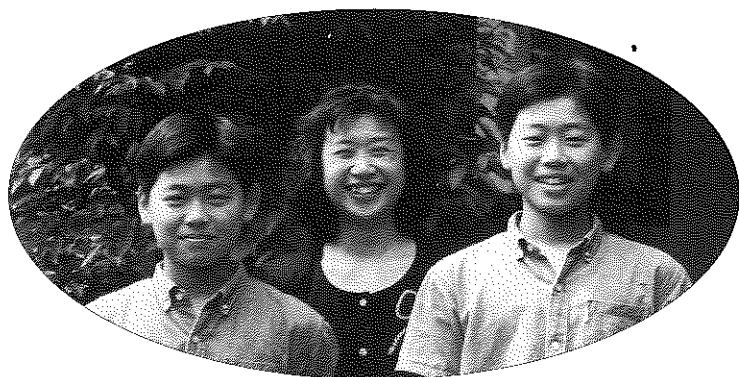
—お子さんには先生ご自身が指導  
していらっしゃるんですか？

はい。ピアノが特別なことという扱いはないので、生活の一部になっていました。練習中は静観しています。練習の成果が出てくると、「親に認められたい」という気になるらしく、自ら「聴いて」と言ってきて、私のアドバイスに耳を傾けるという感じでしょうか。

—これは珍しいですね。先生と母親を2役やるのは非常に難しいことだとお聞きしますが。

干渉しすぎる親が多いのが原因の一つではないかと思います。ピアノを習得するのに、子ども自身の意志がどれだけ働いているのでしょうか。親が子どもの歩むべきレールを敷いている、レッスンや練習の計画も親が立ててしまう、練習の回数も時間も決めてしまう…。親の役割とは、子どもを自立させるように導いてあげることではないでしょうか。私のレッスン生にも、子ども本人には親

に頼  
を自  
まし  
数を  
そう  
解さ  
るよ  
理」  
私の  
  
ンで  
らっ  
私  
設定  
ッス  
こと  
「レ  
を用  
徒に  
は同  
レッ  
しま  
「それ  
して  
「何で  
決し  
があ  
はし  
—  
ん達  
レ  
たこ  
を自  
ない



ンを図るよう努めます。それは、「ピアノ以外」の何か得意分野を知るためです。小学校の高学年にもなると、自分の得意、不得意が自覚できているものです。レッスンではその得意分野を話題にし、結びつけながら進めるようにするのです。レッスンへ通うことが楽しくなれば、それがレッスンに来る意義になるはずです。誉めてあげられるような素材を見つけたら、その得意分野にさせしめた「努力」の過程を意識させること。「頑張ったから出来るようになったんだ」と。そうして、不得意分野になっているピアノも、努力に向かわせるように導いていくのです。

新しい生徒は、前から習っている親子から影響を受けられるようにと、発表会やお茶会の機会を作り、子ども同士、親同士を会話させるようにしています。

1 子どもが自立し、自己管理できるよう、導いてあげること

2 ピアノ以外にも、出来るだけ多くの生活体験をさせてあげること

に頼らないようにと、親には子供を自立させるようにと、言ってきました。練習しないから時間や回数を決めたくないのでしょうが、そうではなく、練習する意義を理解させるための刺激を与えてあげるように努めています。「自己管理」が出来るように、というのが、私の教育方針です。

—他の生徒さんに対するレッスンでも、その方針で指導されていますね？

私のレッスンは、1人1時間と設定しています。「前回と同じレッスンにならないよう、教わったことをマスターしてくること」「レッスン時間分の教材（曲数）を用意してくること」とだけ、生徒に言い聞かせてきました。これは同時に、練習が足りなければ、レッスンが30分、45分で終わってしまうことを教えているのです。「それは有効でない」と、経験として分らせるのです。ですから、「何でやってこなかったの」とは決して言いません。生徒にも事情があるでしょうから、時間で管理はしないことにしています。

—そんな先生の姿勢は、生徒さん達にどう反映されていますか？

レッスンに来ると、「やってきたこと」「やってこなかったこと」を自分から言います。また、弾けないことについては、「練習がで

きなかったから弾けないのか」「練習したけど弾けなかったのか」が自分で理解できています。常に自分の状況を把握し報告できる、というのが身に付いてきたようです。

—ピアノ教育の中で、自立した子どもに育てていくのに、どのような過程を念頭にお持ちですか？

第一に、「音楽を好きにさせること」。最も根本的なことですが、遊びの感覚でこれをベースにしています。

第二に、「努力の意味を教えること」。努力すれば必ず良い結果が生まれ、そのことから喜びが得られ、豊かになれる。そして自分を磨くことにつながるのだと言うことを教えたいと思っています。

第三に、「自信を付けさせること」。自信を持たせることで、得意分野として位置付けることが重要です。子どもはその自信とともに成長し、次への活力となるのです。

この段階を通してこそ、真に自立へ向かうようになるのではと考えています。

—「ピアノをやらされている」という生徒は、一般には大勢いますが、そのような子どもを途中から指導する際はどのようにいらっしゃいますか？

まず、親とのコミュニケーション



——ピアノ指導者と母親を両方経験してみて、「母親」に希望することは何かございますか？

ピアノ以外にも、親は子供に出来るだけ多くの生活体験をさせてほしいですね。レッスンでイメージを伝えるのに、様々な「たとえ」を使います。例えば「こんなことやったことがある？」「〇〇を見たことある？」って。どんな経験をしているか、から始まることが多いものです。関連づける経験が豊富なほど、早く的確になります。色々な体感が、連想を生み、解釈させるのです。言葉だけの表現では限界があります。

——母親がピアノ指導者である生徒が、今後益々増えていくと思われれますが…。

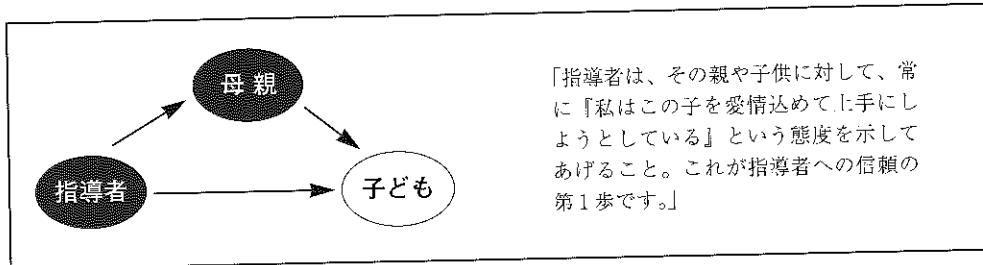
家庭外にピアノ指導者をつける場合ですが、母親は完全に「母親」になるべきだと思います。「今は先生」「今はお母さん」にけじめがない方が少なくありません。子どもにとっては、ピアノの先生よりは母親の方がずっと大切です。母親には、母親らしい愛情を求めているのであり、指導者の愛情を求めているはずは「私にはピアノの先生がいるのに、ママも先生なの？」と、子どもには戸惑いがあるのではないでしょう

か？これを分かって対処しなくては、子どもは寂しい思いをしてしまいます。子どもの心理が分からずに、親が物事を調整していくと、うまくいかない原因となり、子どもにもいろんなストレスがおきて反抗したり体に影響したりします。自分がピアノが分かるだけに「子どもが要求する前には練習に口を出さない」ということは、子どものピアノ上達を切望する私達にとって、大切なことことです。「自分がやっていくようにしむける」…そういう目で見守ってあげたいと思っています。

——ありがとうございました。

では、「母親」の役割を中心にして、実際のレッスン現場でのピアノ指導者とのより良い連携について考えてみよう。

ピアノ指導者が「母親」と連携するには…



徹底した「言葉かけ」の統一を

ピアノに関心の強い母親は、子どもに対しピアノ指導者の通訳者のような役割を持っていると考えられる。この場合に生じ得る問題点は、

- ・ 母親自身の考えを挿入する  
(母親がピアノに詳しい場合)
- ・ 母親が謝った解釈し伝える  
(母親がピアノに詳しくない場合)

「毎日の自宅でのお稽古では、親の考えを加えずに、レッスン時の先生の言葉を正確に理解していただく必要があります。『よく響かせてね』とレッスンで言い聞かせていまして、次のレッスンでは、体を硬くしてガーンと弾いてきたある生

徒(5歳)の場合、家庭でのお母さまの言葉かけが問題でした。以来、お母さまにも、『ほら、こんなに響きが違いますでしょ?』とお話するようにいたしました。お陰で、お母さま方から、少しずつ美しい音の響きが判るようになったとお話しただくようになり、生徒さんも美しい音の流れが感じられるようになってきました。お母さまに育てていただくことが最高の進歩の道とっております。」

たとえ方針は同じでも、特に小さい子どもの場合は、家庭でも同じ言葉の表現を使わせるなどの細やかな注意が必要なようだ。逆に、ピアノ指導者が家庭で我が子の練習をみるときに配慮したいことだ。

母親の能力や関心に応じて、具体的な行動を指示したい

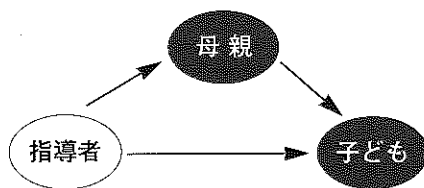
母親に対し、「もっとレッスンに興味を示してほしい」「音楽を分かろうとする意欲を持ってほしい」と殆どのピアノ指導者は願う。しかし、ピアノにそう詳しくはない母親は、母親としてどのように役割を果たすべきかも分からず、それが他人任せになる要因の1つだ。それを分からせる努力として、指導者側は何をしているだろうか？

母親への連絡町を作られている先生も多いが、レッスン誌を発行しているという先生もいた。地村先生の『れっすんたいむ通信』は、文章もイラストも全て手書き。内容はレッスンのスケジュールや親

へのメッセージが中心だが、家庭からのアンケートをお願いするなど、レッスンに関する希望や質問、子どもの近況などを集める努力をなさっているのがひしひしと感じられた。

今の時代、コミュニケーションの方法には苦勞はしない。「何のために協力が必要なのか」「そのために何をしてほしいのか」を具体的にかつ定期的に示しておくことが大切なようだ。その前提として、ピアノ指導者は、母親のピアノ知識や関心度を判断し、「協力を得られる部分に関してはそれを有効に使い、得られない部分に関しては、指導者自ら母親の役割を受け持つ」という意識をもって、「母親」とつきあっていきたい。

「他の先生にお預けしたら、| |を出さないと決めてしまう方が子どもも迷いがなくて良いのかと考えてしまう。親の言うことをきいてみたり、先生の言うことをきいてみたり…は、子どもにとって良くないのでは…」



### 一人立ちするまでに練習の仕方を

子どもの幼い頃は、練習の習慣、レッスンを受ける姿勢を定着させることが、母親の最優先とされる役割だったかもしれない。しかし子どもの成長とともに、1人で学べるよう導いていくことになる。

「娘は3歳からピアノを始めましたが、小学1年の頃から徐々に自分一人で練習するように方向付けました。私がついて練習していた頃は、常に『何をどういう風に注意されたか』という点を本人に思いつきさせるように手助けをしていました。」

「外の先生に全面的にお任せしていますが、テクニク的に乱れてきたときはレッスンに入るようにしています。練習中は、放っておくと惰性で練習していることもあるので、『腕などに無理な練習をしていないか』『何をしようとしているのか』

『何度弾いても出来ないのに続けていないか』などをチェックしています。』

「基本的には子どもの先生を全面的に信頼し、その方針に沿って練習を手助けする、といった関わり方をしています。最終的な方法が間違っていなければ、目先の方法が多少違っていてもそれはかえって多様性ということで勉強にもなるのであまり気にしていません。また、子どもが解釈してきたことに疑問を感じたり判断の付かないことなどは、率直にお尋ねしてご相談し、とにかく親子ともに信頼感に基づいてレッスンを受けられるように心掛けています。」

親離れをしたがる頃に、一人で乗り越えられる力が付いているよう、長期的な視野でピアノも教育していきたい。本物の音楽の楽しさ、感動に子ども達が出会うまでは、的確な努力が必要だ。

ピアノ指導者が「母親」として我が子に接するには…